北九州市環境モデル都市行動計画（グリーンフロンティアプラン）

北九州市が実現する豊かな未来

市民の環境への想いと絆

ストック型社会の理念に基づく低炭素社会づくり

新しい価値観、文化の創造

5年間の取り組み方針

- 環境が先進の街を創る
- 環境が人を育む
- 環境が経済を拓く
- 環境が豊かな社会を支える
- 環境がアジアの絆を深める

北九州市が取組む CO2 削減目標

2005年度（基準年）1,560万t

2030年削減目標：30%
2050年削減目標：50%　アジア地域で150%相当（2,340万t）

いい未来を世界に見せよう
～北九州グリーンフロンティア～

5つのリーディングプロジェクト ～「見える化」「感じる化」プロジェクト～

「低炭素」「自然共生」「資源循環」の3つの要素がそろう若松・響灘地区

低炭素
❶産業モデル
次世代エネルギーパーク

自然共生
❷自然モデル
響灘・鳥がさえずる緑の回廊

資源循環
北九州エコタウン事業

❸市街地モデル
紫川エコリバー構想
市民の「見える化・感じる化」推進と環境による賑わいの創出

❹先進的実験モデル
八幡東田グリーンビレッジ
～環境の視点で企業遊休地の再生・まちづくり～

❺街区モデル
城野地区
低炭素先進モデル街区の形成
～市街地のゼロカーボン街区を目指して～

Green Frontier
環境モデル都市 北九州市

発行：北九州市環境局環境政策部環境首都政策課
電話:093-582-2238　ファクス:093-582-2196
〒803-8501　北九州市小倉北区城内1-1

北九州市の情報はホームページでご覧いただけます。
アドレス http://www.city.kitakyushu.jp/

古紙パルプを含む再生紙を使用しています

発行／平成22年3月　第0911047B号

北九州市 エコツアーガイドブック

Kitakyushu City
Eco Tour Guide Book

+Green −CO_2

～低炭素社会を拓く 環境モデル都市～

環境まちづくり編

EV

環境モデル都市 北九州市

産業と街と自然とのバランス。

低炭素社会を拓く、環境共生のまちづくり。

20世紀、わたしたちのふるさと北九州市は、産業の発展とともに深刻な公害を経験しました。しかし、産学官民が思いを一つにして苦難を乗り越え、青い空と海を取り戻すことができました。

この経験と、豊かな自然、モノづくりのまちとして蓄積した財産を活かし、環境を守り育むまちづくりと環境産業の構築に取り組み、世界の環境首都を目指して前進を続けてきました。

そして迎えた21世紀。一つしかないわたしたちの美しい地球を守るため、日本が、そして世界が低炭素社会を目指して動きはじめています。産業と街と自然が調和した環境共生のまちづくりは、新しい価値観をつくり出すとともに、人の絆を深め、心豊かで住みやすい街をつくります。

もう始まっている取組み、これから始まる取組み。明日の低炭素社会を拓く、環境共生のまちづくりをご紹介します。

環境まちづくり編
～低炭素社会を拓く 環境モデル都市～

Contents

■八幡東田
○近代産業発祥の地・東田 04
○八幡東田グリーンビレッジ構想 06
○北九州スマートコミュニティ創造事業 08

■小倉都心部　紫川近郊
○川と市民と都市機能の調和 10
○小倉都心部での環境への取組み 12
○紫川エコリバー構想 14

■北九州学術研究都市
○環境技術を駆使した新しいまちづくり 16
○エコキャンパス・学研都市 18

■市内の先進的なまちづくり
○低炭素社会を実現する
良質なストック型都市へ 20

■環境まちづくりを支える
市民のチカラ
○エコボイス 22

参考文献
「北九州市の環境」（北九州市）
「ルネッサンスの知恵　～河川整備への道すじ～」
（財団法人 北九州都市協会）
「ヒートアイランド」
（尾島俊雄 著・東洋経済新報社）

写真提供
新日本製鐵株式会社 八幡製鐵所
株式会社新日鉄都市開発
芝浦特機株式会社

1900年 伊藤博文公の視察（建設中の東田第一高炉）

1912年 八幡製鐵所の本事務所と工場群

環境で社会変革を起こすまち

八幡東田 YAHATA HIGASHIDA

近代産業発祥の地・東田は、1901年 東田第一高炉に火が入って以来、時代をリードする役割を担ってきました。

日本の近代化・高度成長を支えてきた八幡東田

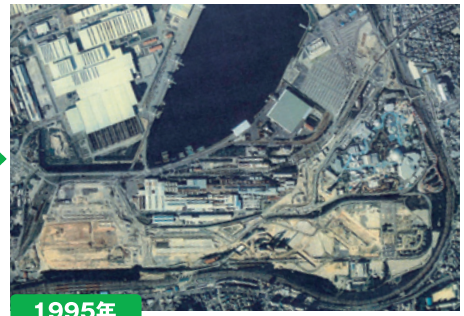
20世紀に入ってまもない明治34(1901)年、官営八幡製鐵所の操業とともに、八幡東田地区で日本の近代産業は産声を上げました。

当時、人口わずか2千人の漁師町だった八幡村の東田地区に官営製鐵所が建設されたのは、陸海の運送などの立地条件に加え、背後に筑豊炭田を控えていたことなどが大きな要因でした。以来、東田地区は鉄鋼業発祥の地として20世紀の日本の近代産業を支え、時代の先導役を担ってきたのです。

東田周辺では製鐵所を中核に化学工業などの重厚長大産業が次々と立地。第2次世界大戦から戦後の激動の時代を経ても揺らぐことはなく、わが国の復興、高度成長に「八幡の鉄」は大きな役割を果たしました。しかしながら、繁栄を誇った東田第一高炉も昭和47(1972)年にその役目を終えることとなり、現在は文化財として保存・公開されています。

現在の東田第一高炉

立ち並ぶ工場群



土地区画整理・基盤整備着工

八幡東田総合開発と八幡東田グリーンビレッジ構想

製鐵所の主力機能が戸畑地区へ移行したことにより、東田には約120ヘクタール(約36万坪)もの広大な遊休地がうまれたため、再開発を行って新しい街づくりに取り組みました。平成2(1990)年、スペースワールドが開業。平成13(2001)年には、「ジャパンエキスポ北九州博覧祭2001」が開催され、東田に息づくモノづくりの心を大切にしながら、21世紀にふさわしい環境配慮の様々な取組みを提示、注目されました。

その後、博覧祭の成果を生かした「八幡東田グリーンビレッジ構想」が策定され、産学官民が一体となって環境共生のまちづくりを進めています。この構想のもと、世界の手本となる「低炭素型都市」の実現へ向けた、時代をリードする東田の挑戦は、今も続いています。

協働による環境共生まちづくり"八幡東田グ リーンビレッジ"

ー環境モデル都市 北九州市の先進的モデル地区ー

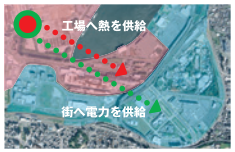
広大な工場跡地を再開発し、高度な都市基盤と環境共生を両立させた次世代のまちづくり、それが「八幡東田グリーンビレッジ構想」です。産学官民がひとつになって取りまとめたもので、低炭素社会をいち早く実践するモデル地区として、その活動と成果に注目が集まっています。

エネルギーの地産地消

「街には電力」「工場へは蒸気」のコラボ供給

東田コジェネ（33,000kw）

クリーン燃料（天然ガス）による発電と工場への熱供給。地区内の基幹エネルギーとしてコジェネ発電の電力を供給。



工場から発生する水素を燃料として供給

北九州水素ステーション

製鐵所から副次的に発生する水素を水素自動車に燃料として供給する次世代エネルギーステーション。地区全体で水素を有効利用する北九州水素タウン事業も進行中。

太陽光発電の積極導入

環境共生住宅 リビオ東田ヴィルコート（約170kw）

いのちのたび博物館（約160kw）

街区まるごとCO2 20%削減事業として環境省認定を受けたマンションをはじめ、地区内に太陽光発電を積極導入。

まち全体が環境ステージ

住民が主役のまちづくり

環境が繋ぐ地域コミュニティ

地区内の立地企業や地域住民が積極的な環境活動を推進。

社長公認
堂々ごみ拾い

エコドライブ
教室

住民等による
植樹活動

誰もが楽しく学べる場

環境ミュージアム

多くの市民から親しまれ、北九州市の公害克服の歴史を紹介するとともに身近なエコライフを学ぶ環境学習施設。家庭での省エネ型ライフスタイルの提案を行う21世紀環境共生型モデル住宅（エコハウス）も併設。

低炭素型の交通システム

カーシェアリング・サイクルシェアリング

「所有から共有」をキーワードに東田立地企業や環境共生住宅の居住者を対象にNPOが自動車や自転車のシェアリングを展開中。

グリーンITで高い省エネを実現

アジアン・フロンティア

国内最大級の環境対応型・次世代データセンター。独自の空調最適化技術で高集積サーバーの最適運用と高い省エネ効果を実現。

環境共生まちづくりを進める協働の場

東田エコクラブ

八幡東田グリーンビレッジ構想の推進拠点として開設。環境配慮型の建物で、民設民営の公民館（まちづくりサロン）をNPOが運営。

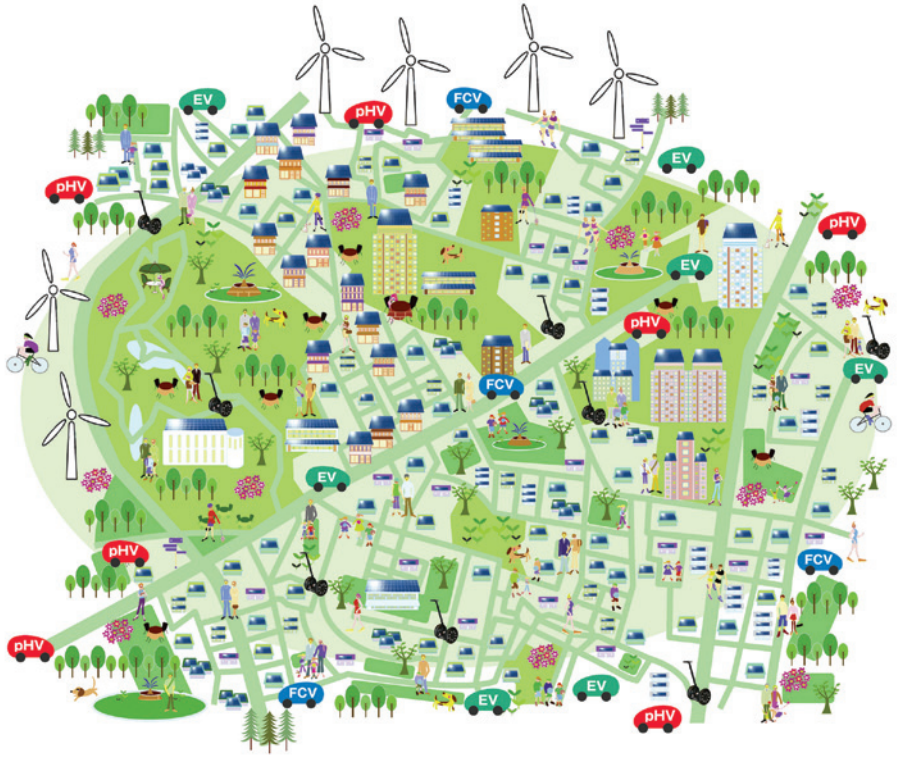
ECO VOICE

環境共生まちづくりは、「市民協働」による街育て。

元 新日鉄都市開発
岩科 健一さん

開発事業者として20数年余、八幡東田開発の歴史を見てきました。まちづくり初期のインフラ整備や施設の建設は、開発事業者の意志（お金と時間）でも、ある程度進められますが、企業進出などが進むにつれ、街の営みの主役は新たな市民（企業・住民）に移っていきます。とりわけグリーンビレッジに見るような多彩な環境メニューとなると、行政や開発事業者だけではお手上げです。まちづくりの志を共有する、地域内外の企業やNPOなど多くの人々が、互いの得意技を持寄って、個々のメニュー実現を分担しあう『市民協働』の街育てが環境共生まちづくりには不可欠です。

これまでの取組みを基盤に世界の低炭素ま ちづくりモデルに挑戦



SMART COMMUNITY

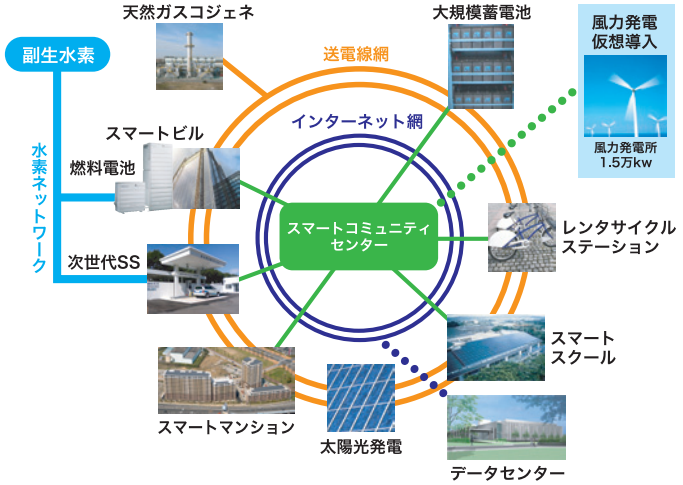
2020年 地域エネルギー低炭素社会モデル
[北九州スマートコミュニティ創造事業]

　これから低炭素社会を築いていくためには、太陽光発電などの自然エネルギーの導入が欠かせません。また、電気自動車や水素で発電する燃料電池などの普及が進めば、より「エネルギー」が身近なものとなります。

　太陽光発電などの自然エネルギーは、天候によって発電できる量が変わってしまうという特性を持っています。この不安定な自然エネルギーと、既存の電線網に蓄電池などを組み合わせ、ＩＴ（情報通信技術）を使って効率的かつ安定的に電力を供給する技術が「スマートグリッド（次世代電線網）」と呼ばれるものです。

　この最先端の取組みが、市民や企業、行政が一体となって、東田地区で始まろうとしています。

太陽光・風力などの自然エネルギーに加え、地域の基幹エネルギーとの連携を図り、
地域単位での最適なエネルギー利用を実現する「スマートコミュニティ」



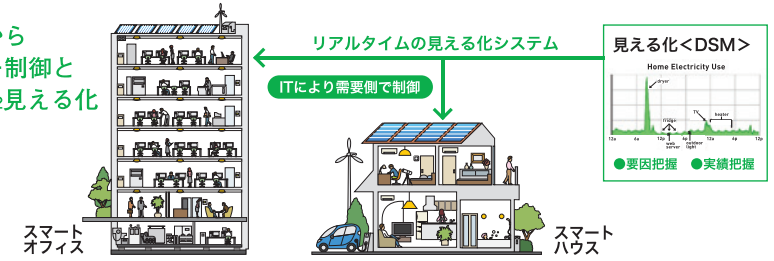
スマートコミュニティセンター

■グリッド監視システムによる需給両面のエネルギー状況の監視

■蓄電池、コジェネ等各機器の遠隔監視、制御

■CO_2のリアルタイムでの「見える化」システムの開発・運用

需要・供給両面から
双方向エネルギー制御と
街区まるごとCO_2見える化



　東田地区の取組みは、「スマートグリッド」を進めることはもちろんですが、例えば、「毎日のエネルギーの使用量がわかるようにする仕組み」「地域全体の電力使用量にあわせて、電気を使いすぎているときは冷暖房温度を変える仕組み」など、これまで電力会社が電気を供給して、スイッチを入れれば照明が点いたり、テレビを見ることができる、「受身」のエネルギーシステムから、市民や企業など電力を使っている消費者自らが参加するエネルギーシステムに変えていくことも検討しています。

　また、次世代自動車である電気自動車や自転車、公共交通機関がより使いやすくなるような仕組みを作るなど、地域全体で低炭素を進める「コミュニティ」を築くという意味から、「スマートコミュニティ」と名づけています。

Kitakyushu City Eco Tour Guide Book
Kitakyushu City Eco Tour Guide Book

にぎわいを環境で創る小倉都心部

紫川近郊 AROUND MURASAKI-RIVER

川と市民と都市機能の調和を目指す紫川

官民あげて取り戻した“清流”

小倉の中心部を流れる、北九州市のシンボル河川「紫川」。その昔は良質のアオノリの産地であり、アユも獲れ、鵜飼も行われていたと伝わっています。

しかし、1960年代には工場排水や生活排水などによって急速に汚染が進み、水質の悪化や悪臭に悩まされていました。

北九州市が発足した昭和38(1963)年、市はまず徹底した水質調査を始め、下水道整備にも着手し、水質浄化に取り組みました。

昭和40年代に入ると、北九州青年会議所から「紫川の清流を取り戻そう」との声が上がったのをきっかけに、河川浄化運動が全市的な展開に。市長自らも掃除に参加するなど、市民と行政とが力をあわせて取り組んだ結果、水質は着実に改善されていきました。

「川が変われば、まちが変わる」 ～マイタウン・マイリバー整備事業～

昭和60年代に入ると、紫川の河川整備と周辺の公園や道路、市街地なども一体的に整備を進める画期的なまちづくり「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」がスタート。川幅を広げて橋を架け替えるとともに、川に背を向けていた周辺の建物も川を向いて建て替えられていきました。

また、川の自然環境とも調和した親しめる水辺空間をつくるため、護岸に自然石を取り入れたり、滝や洲浜広場を整備。紫川の中の様子を観察できる「水環境館」や、川の水を冷暖房システムに利用する商業施設も誕生するなど、環境と調和した様々な取組みが数多く生まれていきました。

黒い川と呼ばれた紫川

密集する不法建築
1979年

1965年

水質汚濁が進み、しだいにアユやその他の魚も姿を消してしまいました。さらに、河畔には水路を塞ぐ不法建築のバラック群が密集し、河川を取り巻く環境は劣悪そのものでした。

市民に愛される川へ

現在の紫川

カヌーを楽しむ市民

美しさを取り戻した紫川は、都心を流れる川でありながら、清流に生息されるといわれるアユやシロウオが遡上し、釣りやボート遊びもでき、自然に親しめ、市民に愛される憩いの川として再生を果たしました。

小倉都心部での環境への取組み

「風の道」として ヒートアイランド現象を緩和

平成5(1993)年、建設省の「環境共生都市(エコシティ)」の指定をきっかけに、紫川の「風の道」づくりが進められました。

河口近くで川の流れが海岸線と直角に交わる場合、海風の風向きと一致し、水温の低さもあいまって、河川は都市の暑さを緩和する「風の道」としての役割を果たします。紫川でも、北側の玄界灘と南側の貫山から吹く風が通り抜けることで、都心部のヒートアイランド現象をやわらげています。

紫川に架かる「風の橋(中島橋)」は、この風をイメージしてつくられています。

ポジ入稿

川の水を活かした省エネシステム

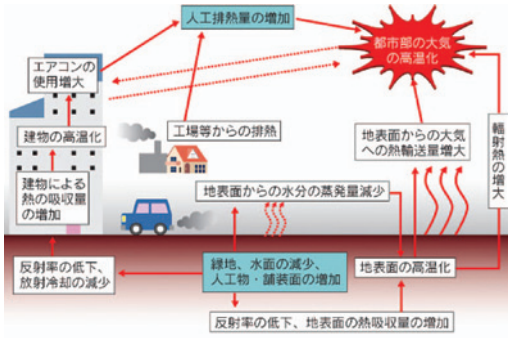
紫川沿いに建つ複合商業施設「リバーウォーク北九州」では、環境負荷を低減させる仕組みを積極的に取り入れています。

外気にくらべて、夏は冷たく冬は温かい川の水を活用した空調システムを導入しているほか、雨水を再利用したり、自然換気や自然採光を活かしたりすることで、エネルギーの低減を実現しています。

ヒートアイランド現象とは

都市部の気温が郊外に比べて高くなる現象で、等温線が島のようになるため、そのように呼ばれています。地表面の人工化(建物・舗装の増加、緑地・水面の減少)やエネルギー消費に伴う人工排熱の増加が原因とされています。

ヒートアイランド現象の影響は、熱帯夜や真夏日の増加だけでなく、熱中症など人体への影響や、冷房用消費電力の増加につながります。



便利で低炭素！ 都心部での公共交通の利用促進

一人あたりのCO_2排出量が少ない公共交通機関の利用促進のため、「ノーマイカー得々キャンペーン」の実施やモノレールの1駅間を100円で乗車できる企画乗車券の販売、自転車での街なか移動を促すコミュニティサイクルの実施など、低炭素社会の実現に向けて、様々な取組みを行っています。

イメージ

夏は涼しく！みんなで打ち水大作戦

打ち水は、暑いときに涼しく過ごすための、日本の昔ながらの知恵です。まいた水が蒸発するときに地面の熱を奪い、風が生まれて周辺の気温が低下します。

気軽に取り組める地球温暖化対策として、北九州市でも平成17(2005)年から環境団体や周辺の商業施設の方々と一緒に、都心部で「打ち水大作戦」を実施しています。

クロスロード(お城通り)での打ち水大作戦

小倉井筒屋の屋上緑化

屋上緑化で省エネ＆憩いの場を提供

屋上緑化は、ヒートアイランド現象の緩和や建物の省エネ効果に加え、心安らぐ空中庭園として、訪れた人々に憩いの場を演出します。小倉都心部では、既存ビルを活用した屋上緑化への取組みが積極的に進められています。

緑あふれる道づくり

JR西小倉駅前から、小倉城や勝山公園を経て九州厚生年金会館へ続く道路(大門木町線)では、既存のケヤキ約160本を大規模に移植し、歩行者が楽しめる並木通りを整備。ケヤキの根を伸長させるため人工基盤土壌を使用し、10年後には、整備前の約3倍にあたるCO_2を吸収する効果も見込んでいます。

Kitakyushu City Eco Tour Guide Book

エコでまちのにぎわいを創る"紫川エコリバー構想"

ー小倉都心部で低炭素社会の姿を示す「見える化・感じる化」リーディングプロジェクトー

環境モデル都市　北九州市のシンボル事業として、小倉都心部に太陽光や風力といった自然エネルギーの積極的な導入、緑化や省エネルギーを推進することによって、低炭素社会のまちの姿をいち早く示し、市民や来訪者への「見える化・感じる化」を図ります。さらに、環境モデル都市の顔にふさわしい環境共生型のまちづくりによって、にぎわいの創出につなげていきます。

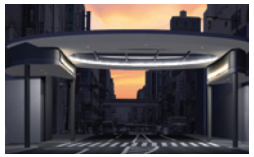
自然エネルギーを活かしたまちづくり

太陽光ルーフ

自然エネルギーをまちなかに積極的に導入することにより、北九州市の玄関口にふさわしい顔づくりを推進。

昼は太陽光発電・夜はLED照明

太陽光やLEDを通じて「光の回廊」づくりを進め、エコで人の導線づくりを推進。



魚町銀天街をつなぐアーケード。にぎわいの導線を演出。

紫川・勝山橋に東西の大型商業施設をつなぐ太陽光ルーフを設置。イベント時にはテント代わりとしても活用。

勝山公園・プロムナードスペースの太陽光ルーフ。夜は蓄電したエネルギーを使ってLED照明が街を彩る。

低炭素技術・手法によるまちづくり

省エネビル

太陽光発電、屋上緑化、高効率機器などを活用した省エネビルの普及を促進。まち全体で低炭素の取組みを推進。

屋上緑化・壁面緑化

商業ビルの協力等で緑化を推進。省エネと憩いの場を提供。

電気自動車＆急速充電器

低炭素交通システムの構築に向けて電気自動車等の次世代モビリティを積極導入。市役所内に急速充電器も設置。

都心で環境が学べる場「水環境館」

紫川や水辺の環境について学べる水環境館を、自然エネルギーなども含めた総合学習拠点へ拡充予定。

Kitakyushu City Eco Tour Guide Book

環境のまちづくりを技術で支える

北九州学術研究都市

THE KITAKYUSHU SCIENCE AND RESEARCH PARK

環境技術を駆使した新しいまちづくり

21世紀における創造的な産業都市

平成元(1989)年、北九州市における近代産業の成長過程で蓄積した技術を活かし、アジアにおける学術研究機能の拠点を目指した「北九州学術研究都市整備構想」が発表され、若松区と八幡西区において整備を進めることになりました。21世紀における創造的な産業都市として再生することを目指し、先端科学技術の教育・研究を行う大学等の集積や産業技術を学術研究都市(学研都市)の研究開発と結びつけ、新たな産業の創造を目的とする画期的なプロジェクトです。

自然を守り自然を育むまちづくり

学研都市では、周辺の自然環境や都市環境を活かしながら、教育・研究機関の集積と良好な住宅地の供給を目標にした複合的なまちづくりを進めています。第1期事業である南部地区はすでに基盤整備が完了し、引き続き整備中の第2期事業、北部地区のまちづくりは、「自然が彩る 人と人が響きあう 人と自然が響きあう」といったコンセプトをもとに「人」と「緑」と「知」が織り成す、独自の新しいまちづくりを展開しています。整備に関しては、可能な限りまとまった形で自然を保全する部分と既存の緑地やため池を取り込んで公園として整備するなど、貴重な動植物の生息環境に配慮した整備が進められています。

環境と共生したまちづくり

学研都市では、自然にやさしく、自然と共生することを目指し、環境と共生する循環型のまちづくりを推進しています。

❶排水性舗装／降雨時に道路表面での滞水を排除することにより安全な走行を確保。

❷保水性舗装／歩道にリサイクル材を活用し雨水の地下浸透を図るとともに舗装面の温度上昇を抑制。

❸既存ため池の利用／利水と調整池機能を持つため池の周辺を緑地も含め保全し環境や景観に配慮。

❹既存緑地の保存と緑化／既存の緑地を保全するとともに公園整備や斜面緑化を積極的に推進。

ニッポンバラタナゴ

メダカ

カスミサンショウウオ

キンラン

貴重な生物の環境保全措置

学研都市内には、ニッポンバラタナゴ、メダカ、カスミサンショウウオ、キンランなどの貴重な動植物が生息しています。これらの保全については専門家の意見を聞きながら対策を行い、整備を進めています。

学研都市では新エネルギーを率先して導入しています

環境先端技術の研究拠点でもある学研都市では、教育や研究活動に必要なエネルギーや水を環境に配慮して効率的に供給するため、様々な新エネルギーの導入や工夫が凝らされています。

換気用の煙突
ソーラーチムニー

●環境共生

自然の風や光を有効利用し電気や熱を節約。さらに、屋上・壁面緑化推進や地中熱を活用。

●水リサイクル

使った水はきれいにして再利用するシステムを利用。さらに、ビオトープや自然型水路も整備。

新エネ百選

平成21年4月、経済産業省とNEDOによる「新エネ百選」に選定されました。

太陽光発電:150kW

燃料電池:200kW

ガスエンジン発電機:160kW

●発電・発熱

クリーンな新エネルギーを積極的に導入。つくった電気や熱などを無駄なく供給する複合エネルギーシステムを導入。

エコキャンパス・学研都市は、環境との共 生の技術を拓いています。

「アジアの先端産業都市」の実現を目指す学研都市

北九州学術研究都市は、理工学系の国・公・私立大学や研究機関が同一の敷地内に集積するという独自の試みとして、平成13(2001)年4月にオープンしました。現在、4つの大学(1学部4大学院)があり、多くの研究機関や研究開発型企業が進出しています。

これらの大学・研究機関では、次世代を支える産業として有望な「環境」と「情報」に関する分野を中心に"知の集積"が行われ、アジアをリードする先端産業都市として、さまざまな技術や製品が生み出されています。

進む"知の集積"　進出大学・研究機関紹介

❶北九州市立大学
●国際環境工学部　●大学院 国際環境工学研究科

❷九州工業大学大学院
●生命体工学研究科

❸早稲田大学大学院
●情報生産システム研究科

Ⓐ産学連携センター
産・学・官が手を組んで研究を進める中核施設

❹福岡大学大学院 ●工学研究科

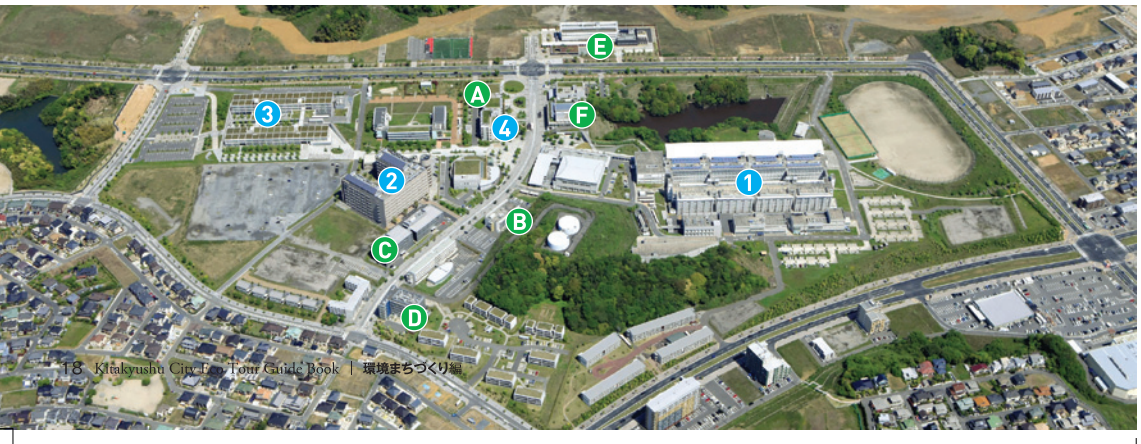
Ⓑ共同研究開発センター
半導体微細加工技術の研究開発を支援する研究開発施設

Ⓒ情報技術高度化センター
ネットワークや半導体設計に関する研究開発、人材育成を行う施設

Ⓓ事業化支援センター
大学発ベンチャー等の研究開発や事業化を支援する施設

Ⓔ技術開発交流センター
カーエレクトロニクス分野等での新たな技術開発を支援する施設

Ⓕ学術情報センター
情報を集積・発信するマルチメディアステーション



「産」と「学」のコーディネーター "FAIS"

FAIS(財団法人北九州産業学術推進機構)では、「産」と「学」を結ぶパイプ役として、先端科学技術分野の研究を行う大学・研究機関の知的基盤を活用した産学共同研究や技術移転のコーディネートを行い、カーエレクトロニクス、半導体、ロボット開発などの分野で産業技術の高度化や新たな産業やベンチャー企業の創出をお手伝いしています。

●カーエレクトロニクスの拠点化

近年、「安全」「環境」「快適」をキーワードに進んでいるハイブリッド技術などの自動車の電子化(高機能化)を支えているのが、車載半導体と組込みソフトウェアを要素としたカーエレクトロニクス技術(組込みシステム)です。

重要性が高まるこの分野を支える技術者の育成が急務となっているため、平成19(2007)年に「カー・エレクトロニクスセンター」を開設し、実践的な人材育成と研究開発を進めています。

●半導体の設計・応用技術の拠点化

半導体技術センターでは、エレクトロニクス産業の中核的技術となる半導体設計・応用の拠点化を進めています。特に半導体企業の地域クラスター形成のため、ベンチャー企業の育成、人材育成、産学連携の促進などの事業を展開しています。

学研都市から生まれた環境技術

学研都市では、産・学・官連携による画期的な研究開発が行われています。環境に配慮した技術や製品は国内外から高い評価を受け、さまざまな分野で新たな革新技術を生み出し次代をリードしています。

●環境にやさしい泡消火剤と高性能新型消防車

従来の石油系消火剤に比べ、分解時間を大幅に短縮(2週間→1～2日)し環境負荷が少ない天然石けん系泡消火剤「ミラクルフォーム」。水量を従来の1／17に減らし、消火力の高い泡を多量に発生する方式で消防士の負担や階下の水損を大幅に軽減する高性能新型消防車「ミラクルキャフス」。平成19(2007)年　産学官連携功労者表彰「総務大臣賞」を受賞しました。

ミラクルキャフス
(専用消防車)

ミラクルフォーム
(石けん系泡消火剤)

●廃プラスチックの接触分解油化

使用済みの触媒を利用した廃プラスチックの油化技術で、一般廃プラスチック(RPF)からでも、ワックス分や残留塩素がほとんどない高品質分解油を高効率かつ安価に生成する技術で、リサイクル分野をはじめ幅広い市場展開が期待されています。

学研都市で生まれた研究成果と製品を展示

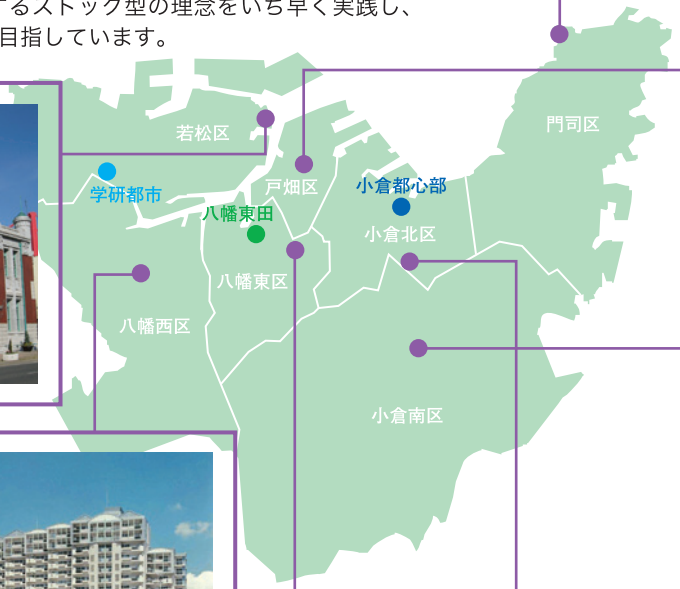
産学連携センタービル１階に、学研都市で研究・開発された成果や製品を集めた展示ルームを開設しています。入場無料ですので、お気軽にお立ち寄りください。

Kitakyushu City Eco Tour Guide Book

北九州市内には先進的なまちづくりがいっぱい

低炭素社会を実現する良質なストック型都市へ

ここまでご紹介してきた「八幡東田」「小倉都心部」「学研都市」のそれぞれに特長ある先進的なまちづくりに加え、北九州市内には低炭素社会の実現に向けたさまざまな取組みが進められています。世代を超えた資産と資源を有効に蓄積・活用するストック型の理念をいち早く実践し、長寿命かつエネルギー利用が少ない持続可能な都市を目指しています。



●若松南海岸

歴史的建築物を再生して活用

石炭景気に沸いた若松の歴史と発展を伝える大正期を中心とした建物群が立ち並ぶ。旧古河鉱業若松ビル（国登録有形文化財）は、交流・文化・観光の拠点施設として再生、愛用されています。

●マ・テール穴生

全国初の環境共生型高層住宅

高断熱仕様、ソーラーシステム、地形を活かした緑化駐車場など、環境配慮のさまざまな工夫を取り入れています。平成8年度　建設大臣賞、住宅金融公庫総裁賞を受賞しました。

●ネクスタージュ高見七条 弐番館

九州初の省CO_2推進モデルマンション

国の「住宅・建築物省CO_2推進モデル事業」に九州で初めて採択され、太陽光発電システム、外断熱工法などのハード面と事業の検証・成果普及等のソフト面など、様々な方策を折り込んだ次世代型マンションです。

●門司港レトロ

歴史的建造物を活かした観光拠点

旧門司三井倶楽部をはじめとした大正ロマンあふれる歴史的建造物や関門海峡の自然景観など、魅力ある資源を活かした新しい都市型観光拠点に市内外から多くの観光客でにぎわっています。

●戸畑C街区

多世代共生型のまちづくり

大規模な市有地を活用し、区役所や市営住宅、保育所、高齢者複合施設などを一体的に整備し、多世代共生型のまちづくりを進めています。緑化された屋上は、ふれあいの丘として地域に親しまれています。

●ニューガイア上石田

太陽光発電のビジネスモデル

賃貸マンションでありながら、太陽光で発電した電力を共有部分のみならず全戸に供給する斬新な手法を採用。日本初の試みが評価され、第10回　新エネ大賞の経済産業大臣賞を受賞しました。

●城野地区

ゼロカーボンを目指す
低炭素先進モデル街区の形成

小倉北区城野地区では、次世代の低炭素技術を集積した先進のまちづくりを進めます。エリア内の自然を活かした環境づくりとともに、エネルギーを効率的に活用する供給システムや長寿命・省エネ住宅などを整備します。

川づくりは、地域づくり・人づくり。

（財）タカミヤ・マリバー
環境保護財団　理事長
高宮　俊諦 さん

全国でも有数の公害汚染都市であった北九州市の公害克服の取組みで象徴的な活動が紫川の河川浄化運動でした。

「紫川に鮎を呼び戻す会」は真っ黒に汚れてしまった紫川を何とか昔の清流に戻そうと地域の有志が集まり、熱い思いで昭和６０年にスタート。その後、その輪は大きく広がり「Ｍ－ＣＡＰ」「タカミヤ・マリバー環境保護財団」の設立と発展していきました。

川づくりは地域づくり、人づくりと言われています。当財団は、この街の恵まれた自然を通して、生き物の命の大切さから、持続可能な地球環境づくりまでを学び、そして環境モデル都市北九州が掲げる低炭素社会の実現に向けて、市民一人ひとりが環境に対しての義務と責任を持てる土壌作りのお手伝いが出来ればと願っております。

紫川での「アユの放流祭」、「ボランティア大清掃」も２５回目を迎えますが、更に北九州全域の自然環境の美化・保全に取り組んでいく決意をしています。

大きな広がりをみせる身近なエコライフ。

北九州エコライフステージ
実行委員会　委員長
北九州ESD協議会 副代表
三隅　佳子 さん

「北九州エコライフステージ」は2002年からスタートし、多くの市民・NPO・企業・学校などの協働によって多彩な環境活動を展開してきました。2009年10月に開催した「エコスタイルタウン2009」では世界の環境首都を目指して『さあ行動しよう、私たちにデキルコト』をテーマに90団体・15万人の市民が参加しました。2009年は、市が低炭素社会に向けての取組みを行動に移し始めた年。地球温暖化をはじめ、現在、世界中で環境問題に注目が集まっていますが、市民一人ひとりの意識や行動こそが問題解決の『鍵』となります。環境問題を「知っている」から「やっている」と言えるようなエコなライフスタイルを身につけたいものです。

エコライフステージでは、低炭素社会づくりを通じて持続可能な社会を目標に交流や情報発信、様々な団体からの提案を活かして「環境文化の根づいたまち・北九州」の創造を目指したいと思います。

「平成竹取伝説」竹林保全活動

北九州市立大学
国際環境工学部
建築デザイン学科 准教授
NPO北九州ビオトープ・ネットワーク研究会
理事長
デワンカー バート さん

人間の日常活動範囲内に残された里山は、古くは薪や山菜を提供し、水源を守るなど、我々の生活には欠かせない資源でした。

しかしながら、人間が手を加えることによって成立していた里山は、内包する竹林の侵食などによって、それまであった樹木を枯死させるなど林相を大きく変貌させ、生物の多様性が失われつつあります。全国で一番の竹林面積を所有する北九州市は、ほとんどの竹林が放置されている現状です。そこで、北九州学術研究都市の周辺地域の竹林を中心に整備することにより、森林への竹の侵食を阻止し、地球温暖化防止対策や生物多様性の確保を図り、里山を保全することを目指します。

2004年1月より開始の「平成竹取伝説」では、多くのみなさまの参加により北九州学術研究都市や周辺地域の竹林を整備し、親しめる里山づくりを目指して活動を展開しています。

ストック型（長寿命型）社会構造への転換を。

次世代システム研究所 所長
九州国際大学 客員教授
岡本　久人 さん

戦後の日本で行われてきた資源やエネルギーの大量消費型・フロー型(短寿命型)の経済社会システムは、資源エネルギーの枯渇や欧州先進国に比べて生活の質の低さ、加えて産業の国際競争力の低下を招いてきました。

次世代社会システム研究会では、このような社会のシステムを変えて、地球環境の持続性や生活の豊かさの確保、産業・経済の健全性にあふれたストック型(長寿命型)へと移行し、人々が真の豊かさを実感できる社会とするため、研究と実践に取り組んでいます。

例えば、ストック型の家づくりを行えば、資産を未来の世代に残すことができることはもちろん、災害に強く安心な家であること、省エネルギー・自然環境へ配慮したものであること、また生活スタイルの変化によって改装ができることなど、住みやすさを兼ね備えることもできます。